

題 言

茲に本誌第6集の発刊に際し、われ等道民の齊しく待望措かざる天皇、皇后兩陛下本道行幸啓の盛事を間近に控えて、謹んで有り難き聖慮のほどを仰ぎ奉り、その榮ある日の輝かしき情景を想望して、心から奉迎の誠を捧げるものである。

最近、わが国民の生命に関する重大問題として人心の不安を招き、朝野を挙げてこれが対策に腐心している問題に、放射能灰の大気及び海水汚染による被災事件があり、また、食糧不足に悩む敗戦国における悲劇のひとつとも見るべき黄変米の問題がある。しかもこれが政治的乃至行政的の解決は、勿論政府の措置及び国会等におけるいわゆる為政者の手腕に俟たねばならぬが、一方問題の根本たる放射能及び黄変米その物の人体に及ぼす影響如何の究明は、われわれ科学者に与えられた新たな課題でなければならない。

まことに“天に風雪、人に禍福、”といわれるように、自然と人事との極めて複雑微妙な現象に囲繞せられているわれわれ人間の生活環境は、時あつて思わざる異変に遭遇することの免れ難いのが常態である。けだし、この放射能及び黄変米の問題の如きも、たまたまその一部の現われとも見るべきものの一つであつて、いわゆる二つの世界の対峙するところ、戦後世界における平和主唱の先達をもつて任ずるわが国まで種々好ましからざる影響の襲來を避け得ない状況にあることは、まことに心許ない極みである。

ともあれ、われわれ衛研に従事する者に課せられた使命は、あくまでも科学知識及びそれを基礎とする技術の活用による事物の究明である。しかも現実の世界は、皮肉にも学問技術の進歩發達を尻目に、つぎつぎと新たなる難問を投げかけて吾人を警醒しその發奮を促してやまない。この意味において這般本庁企画室が、試験研究機関連絡協議会の設置を目論みこれを実施して、隨時交見の機会を作り、また本道総合開発事業推進上至急解明を要する事項の選択究明等に衆智をあつめて鋭意成果の顕現に努められつつあることは、まことに意義深き有効の措置であつて、會議の一員たる吾人の深く欣懐とし且つ責務の重大を痛感する次第である。

聊か所思の一端を述べて所員の断えざる精進努力に期待すると共に、大方諸彦の御支援と御鞭撻とを願つてやまない次第である。

昭和29年7月中浣

北海道立衛生研究所長 中 村 豊